

『きみは不埒なエゴイスト』

著: 春原いずみ

ill: 鶴

「可愛い……。ほら、乳首がちゃあんと堅くなって、コロコロって……」

「ひ、ひとの身体で遊ぶなあ……。っ！」

瀬川は耳まで真っ赤になってわめくと、多岐を押しつけ、ベッドから飛び降りた。

「あ、あんたなっ、そうやって、俺からかっておもしろいのかよっ」

ドアに張りつく瀬川に、多岐はベッドに横向きに倒れたまま、くすくす笑っている。乱れた髪がさらさらと目の上にかかり、彼はそれを指先でかき上げる。悪(いた)戯(ずら)っぽくきらきらと輝くアンバーの瞳。

「からかってなんかいないよ。僕はいつでも、瀬川せんせには、ほんとのことしか言っていないと思うけど？」

「……」

ここではたとえてしまうのが、瀬川の良さであり、また最大の欠点だ。

東北の名家の御(おん)曹(ぞう)司(し)として育った瀬川は、いい意味でも悪い意味でも育ちがよすぎる。彼は万事に素直に過ぎるのだ。

「……嘘を言うのと……てめえに都合のいいことしか言わねえのは、俺からすれば、意味合い的には一緒だ。あんたは……言いたくねえことは、いつも言わずにすまじやがる」

「真実だけが、いつも正しいわけじゃないもん」

多岐は乱れたネクタイを直しながら、ゆっくりとベッドから降りた。そして、ドアに張りついたままの瀬川の前に立つ。今にも息がかかりそうな位置に立って、多岐はふざけたように首を傾け、きゅっと片眉を上げて見せた。

一見、多岐はしなやかな身体つきのせいで小柄に見えるが、実際には瀬川とそれほど大きく身長は変わらない。だから、そうやって向かい合って立つと、視線も何もかもぴたりと合ってしまうのだ。

「事実はず……」

多岐の唇が笑う。ゆっくりと瀬川の唇に近づく。

「結局、こういうものだよ」

唇が重なる。ちらりとこのぞくピンク色の舌先が、いかにもおいしそうに瀬川の唇を舐める。左手で瀬川の肩を掴み、右手でその胸に触れて。

「……っ」

医師の爪は、いつもきっちりと短く切りつめられ、きれいにヤスリがかけられている。ひとの身体に触れる仕事だからだ。その指先がつんと瀬川の乳首を術衣の上から弾いた。

「……だよ」

ちゅっと軽い音を立てて、キスはほどかれる。

「何……？」

多岐の微かな囁きは、瀬川の唇に溶けて、耳にまで届かない。

「あんた、今何……」

「内緒」

ドアに手をかけ、多岐はまたうっすらと笑う。口元だけのぞっとするほど美しい笑み。

「絶対に……教えたくない」

「お、おい……わあっ！」

多岐の腕の力はなかなか凄まじい。瀬川を寄りかからせたまま、簡単に外開きのドアを開けてしまうのだ。

「な、何す……っ！」

廊下に転げ出して、瀬川はわめく。

「こけるじゃ……」

「おや、珍しいところからご登場ですね」

ふいに聞こえた響きのよいテノール。曖(あい)昧(まい)さのまったくないはっきりとした口調。

“げ……”

中途半端な姿勢のまま、瀬川は固まってしまう。

“何でまた、よりによって……っ”

「ええ、ちょっとお昼寝など」

背後でのんびりと答えるのは、もちろん多岐である。

「オペが中止になって退屈を困っている瀬川先生に、添い寝してあげてました」

「な、何言い出すんだっ、あんたはっ！」

世の中には言っている冗談と悪い冗談があると思う。さしずめ、今の多岐の言葉など、おそらく言っではいけないジョークの代表格だろう。

「ば、馬鹿なこと……っ」

赤くなったり青くなったりしながらわめく瀬川に、多岐は涼しい顔でにっこりするだけだ。瀬川のすぐ前には当然のことながら、生きて歩いている西洋人形氏がいるはずである。

瀬川は、なぜか中本要という、この上司が苦手だった。決して、気が合わないわけではなく、仕事ではいちばん多く組んでいるパートナーであり、絶対の信頼を置いている先輩医師なのだが、ひとたびオペ室を出ると、瀬川はほとんど一目散に中本のそばから逃げ出していた。

“何かさあ……わっかんねえんだよな……このひと……”

瀬川には、自分が単細胞であるという自覚がある。上から下までが一本でできている、実にわかりやすいキャラだという自覚があるのだ。そんな瀬川にとって、表情がまったく読めず、いつも同じテンションを保っている中本は、何を考えているのかまったくわからない未知の人格だった。わからないという点では、多岐もいい勝負だと思うが、饒(じょう)舌(ぜつ)な分だけまだました。

「俺、まだ回診してないんで……」

なるべく、その緑がかかった茶色の瞳を見てしまわないよう視線をそらしながら、瀬川はこそこそと逃げ出す。

“何だっけ……髪の毛が蛇で……その瞳を見ると石になるっての……”

「おや、私はゴルゴンですか？」

“げ……っ”

中本には、どうやら読心術の心得まであるらしい。瀬川は思わず顔を上げてしまう。「……」

そこに立っていたのは、白衣でも着ていなければ、いったい何の仕事をしている何人なのか、まったくわからないツーショットだった。

人並み外れた美貌の多岐と、まるきり欧米人の外見を持つ中本。瀬川にとって、おそらく、この世でいちばん見たくないツーショットがそこにある。

「……失礼します」

わけのわからない敗北感にさいなまれて、瀬川はとぼとぼその場を去ったのだった。

本文 p60～65 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>